

資 料

コミュニティ・エンパワメントの概念分析

A Concept Analysis of Community Empowerment

野田万里, 千田みゆき

Mari Noda, Miyuki Chida

キーワード：コミュニティ・エンパワメント, 概念分析, 地域の課題解決

Key words : Community Empowerment, Concept Analysis, Solution of community issues

要 旨

本研究は、コミュニティ・エンパワメントの概念が持つ構成要素を明らかにし、概念の定義を再構築することを目的とする。

35 文献を分析対象として、Rodgers の概念分析法に準じ、本質、属性、前提、先行要件、影響要因、帰結、代用語、類似語に分け、分析した。

その結果、コミュニティ・エンパワメントは、「誰もが安心して暮らせる健康な地域を目指して、組織や地域の人々が、対等な立場で互いに話し合い、合意の形成を行う中で、緩やかな絆でつながり、支えあう関係を形成し、共通の課題解決に向かうプロセスである」と定義できた。

保健師等の支援者がコミュニティ・エンパワメントへの支援を行う上で、活動に共感するパートナーという意識を常に持ち、グループの発展の段階に応じて住民組織と関わっていく必要性が示唆された。

I. はじめに

世界保健機構 (WHO) は、1986 年オタワ憲章で、ヘルスプロモーションを提唱し、その活動方法の一つとして、地域活動の強化を掲げている。主体的な住民組織活動を重視し、地域活動の強化の項で、コミュニティ・エンパワメントという用語を使用している (WHO, 1986)。

エンパワメントは、個人、組織、コミュニティの 3 つのレベル、あるいは個人と集団・地域の 2 つのレベルで分類されることが多い (尾崎ら, 2002). 清水ら (1997) は、コミュニティ・エンパワメントを個人とコミュニティ

の 2 領域に分けて考えており、「個人や組織にとって必要な協調的な努力に対してコミュニティの社会的・政治的・経済的資源をより大きな社会から獲得するなどして整備し、またそれらを利用しやすくすることである」と定義している。その上で、個人のエンパワメントとコミュニティ・エンパワメントには、相互作用があるとしている (清水ら, 1997)。

コミュニティ・エンパワメントについて、麻原 (2000) は、集団及び地域のメンバーが共通の問題を解決できるよう力を集結し、生活をコントロールできる力をつけることで、メンバーが個々人の生活上の問題を地域住民の共通の問題として認識することと示している。そして、

受付日：2016 年 9 月 30 日 受理日：2017 年 1 月 24 日

埼玉医科大学保健医療学部看護学科

地域全体としての変化だけでなく、その過程で住民個人もエンパワーされていくと述べている。

日本におけるコミュニティ・エンパワメントの研究の動向として、当事者グループなど自主的なグループ活動におけるコミュニティ・エンパワメントの特性を質的に分析した研究（大木ら，2006；成木，2008；大木，2008），保健師を対象としたコミュニティ・エンパワメントの支援技術を質的に分析した研究（中山，2009；大木，2008）がある。さらに、住民からみたコミュニティ・エンパワメントの望ましい状態を質的に分析した研究（中山ら，2005），そして、評価指標に関する質的研究（中山，2007）がなされ、コミュニティ・エンパワメントへの支援を行う上での示唆を提供している。しかし、同時に、中山（2006）が、エンパワメントと同様、コミュニティ・エンパワメントも定義が明確ではなく、多様な分野で用いられ、それぞれの概念的な整理も十分に行われていないことも指摘している。このように、コミュニティ・エンパワメントを明確に定義した先行研究は見当たらなかった。

そこで、本研究では、コミュニティ・エンパワメントの概念が持つ構成要素を明らかにし、概念の定義を再構築することを目的とする。これにより、今後の研究やコミュニティ・エンパワメントを推進するための支援を行う上での示唆を得たいと考えた。

II. 研究目的

本研究は、コミュニティ・エンパワメントの概念が持つ構成要素を明らかにし、概念の定義を再構築することを目的とする。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

文献的研究

2. 対象文献

医学中央雑誌 web で、2014 年 11 月 28 日に、「コミュニティ・エンパワメント」をキーワードに検索し、27 件の文献が検索された。同様に、「コミュニティエンパワメント」では 10 件、「コミュニティ・エンパワーメント」では 7 件の文献が検索された。さらに、国立情報科学研究所 (CiNii) web で、2014 年 12 月 10 日に、「コミュニティエンパワメント」で検索し、109 件の文献が検索された。重複している文献等を除き、これらに、コミュニティ・エンパワメントに関する記述がみられる書籍 2 冊を加え、35 文献を分析対象とした。

3. 概念分析の方法

分析は、Rodgers の概念分析のアプローチ法を参考とした (Lorraine, et al., 2005; 田代ら, 2002a; 田代ら, 2002b)。Rodgers(2000)の概念分析のアプローチ法は、概念を時間や状況に応じて変化するとし、言葉の性質や使われ方に焦点を当て、その概念を構成する要素を抽出することで概念の特徴を明らかにしようとするものである。Walker&Avant, Chinn&Kramer の手法では、概念はどちらかという静的で普遍的であると捉えているのに対し、Rodgers (2000) は、概念は開発されるものであり、時間の流れの中で使用され、適用され、再評価され、洗練されるとしている (上村ら, 2006)。コミュニティ・エンパワメントは、時代や社会的・文化的背景の影響を強く受ける可能性がある。このことから、本研究の文献検討の方法として適していると考えた。具体的には、文献ごとにコミュニティ・エンパワメントの本質と概念を構成する属性 (関連因子)、概念に先行して生じる要件として先行要件、前提、概念の結果もたらされる帰結、及び、代用語、類似語に関する記述を抽出し、カテゴリー化した。そして、対象とする概念の定義を再構築し、モデルケースを示して、再構築した定義を裏付けするという手順で検討した。また、分析の妥当性を確保するため、地域看護学に精通している研究者、概念分析の指導経験のある経験者から指導を受けた。

IV. 結果

コミュニティ・エンパワメントの概念分析の結果として、対象文献におけるコミュニティ・エンパワメントの本質と属性、前提、先行要件、影響要因、帰結、代用語・類似語の内容について以下に述べる。以下、分析の結果について、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは< >で示す。

概念は、本質と属性から構成されるが、構成要素とは、本質と属性だけでなく、対象とする概念に関わる前提、先行要件、影響要因、帰結の全ての要素を含むものであるとする。

1. 本質と属性 (表 1,2)

本質としては、< 集団として保健上の課題に気づき、その改善に向けて行動をおこしていくプロセスであり、アウトカムを含む。>< コミュニティの力を引き出し、力を活かす条件をつくり、近隣同士が緩やかな絆で繋がりがり、支え合って生活を営める関係を形成する。>< 近隣地域人々の中に“心遣い合う”絆を形成することで人の輪や支え合う関係をつくる。>< コミュニティが自分達の問題をコントロールするプロセス若しくはそのメカニズム>の 4 つのサブカテゴリーから、【人と人とが緩

表1 本質

カテゴリ	サブカテゴリ	文献
人と人が緩やかな絆で繋がりが支えあう関係に至る、地域の課題解決のプロセス。	集団として保健上の課題に気づき、その改善に向けて行動をおこしていくプロセスであり、アウトカムを含む。	中山ら,2005;中山,2006
	コミュニティの力を引き出し、力を活かす条件をつくり近隣同士が緩やかな絆で繋がりが支え合って生活を営める関係を形成する。	杉澤ら,2006;森ら,2009;井上,2011
	近隣地域人々の中に“心遣いし合う”絆を形成することで人の輪や支え合う関係をつくる。	成木,2008;津村,2011;高木,2006
	コミュニティが自分達の問題をコントロールするプロセス若しくはそのメカニズム	川本ら,2012

表2 属性

カテゴリ	サブカテゴリ	文献
すべての人々が対等な立場で参加する。	すべての人々が対等の立場で参加する。	尾崎ら,2002
	協働する組織間との対等な関係	遠藤ら,2013
自由な発言・議論により、意思決定・合意形成される。	民主的な問題解決による組織の成長	福本ら,2013;中山,2006;中山,2007;尾崎ら,2002
	組織の自由度	岡田,2009
	目的・目標の明確化、課題の共有、自由な発言の場	津村,2011
	課題にどう取り組むかの議論が不可欠	藤内,2006
	目標及び解決方法についての意思決定、合意形成	麻原,2000

やかな絆で繋がりが支えあう関係に至る、地域の課題解決のプロセス。】が抽出された。

属性としては、＜すべての人々が対等の立場で参加する。＞＜協働する組織間との対等な関係＞の2つのサブカテゴリから、【すべての人々が対等な立場で参加する。】が、＜民主的な問題解決による組織の成長＞＜組織の自由度＞＜目的・目標の明確化、課題の共有、自由な発言の場＞＜課題にどう取り組むかの議論が不可欠＞＜目標及び解決方法についての意思決定、合意形成＞の5つのサブカテゴリから、【自由な発言・議論により、意思決定・合意形成される。】が抽出された。

2. 前提 (表3)

前提としては、＜地域コミュニティの希薄化＞＜地方自治の後退＞＜潜在的な健康問題＞の3つのサブカテゴリから、【地域の課題があること】が抽出された。

表3 前提

カテゴリ	サブカテゴリ	文献
地域の課題があること	地域コミュニティの希薄化	成木,2008;井上,2011;津村,2011
	地方自治の後退	藤内,2006
	潜在的な健康問題	麻原,2000

3. 先行要件 (表4)

先行要件としては、＜自分と他人の両方を大事にしている。＞＜地域への愛着心、興味・関心がある。＞＜自分自身が力を持っているという意識を持つこと＞の3

つのサブカテゴリから、【個人の側面における先行要件】が抽出された。

＜リーダーの存在＞＜住民の主体性（住民参加）、自己決定、パートナーシップ＞＜住民同士の交流・連帯感・相互作用＞＜自分たちの生活は自分たちが変えうるという信念がある＞＜自分たちの置かれた状況への批判的な意識、問題への気づき（住民のニーズ）、課題の共有、地域社会への働きかけ（情報発信）＞の5つのカテゴリから、【組織の側面における先行要件】が抽出された。

＜支援者の地域住民への信頼及びコミュニティ・エンパワメントの視点＞のサブカテゴリから、【支援者の側面における先行要件】が抽出された。

表4 先行要件

カテゴリ	サブカテゴリ	文献
個人の側面における先行要件	自分と他人の両方を大事にしている。	中山ら,2005;中山ら,2006
	地域への愛着心、興味・関心がある。	中山ら,2005;中山ら,2006;山田,2007;青山ら,2010;遠藤ら,2013
	自分自身が力を持っているという意識を持つこと	渡辺,2012
組織の側面における先行要件	リーダーの存在	中山ら,2005;中山ら,2006
	住民の主体性(住民参加)、自己決定、パートナーシップ	中山ら,2005;中山ら,2006;安梅ら,2005;杉澤ら,2006;福本ら,2013;尾崎ら,2002;遠藤ら,2013
	住民同士の交流・連帯感・相互作用	中山ら,2005;中山ら,2006;山田,2007;井上,2011;高木,2006
	自分たちの生活は自分たちが変えうるという信念がある。	尾崎ら,2002
	自分たちの置かれた状況への批判的な意識、問題への気づき(住民のニーズ)、課題の共有、地域社会への働きかけ(情報発信)	中山ら,2005;中山ら,2006;杉澤ら,2006;福本ら,2013;麻原ら,2003;森ら,2009;中山,2006
支援者の側面における先行要件	支援者の地域住民への信頼及びコミュニティ・エンパワメントの視点	大木,2010a;松本ら,2013;麻原ら,2003;森ら,2009;大木,2008;中山,2006;麻原,2000

4. 影響要因 (表5)

影響要因としては、＜個人力＞＜他者との交流＞＜個人の価値観・感情＞の3つのサブカテゴリから、【個人の側面における影響要因】が抽出された。

＜グループ力＞＜グループ外の組織等（地域）との交流＞の2つのサブカテゴリから、【組織の側面における影響要因】が抽出された。

＜直接的支援＞＜支援者の知識・技術＞＜周辺地域の環境づくりや働きかけ＞の3つのサブカテゴリから、【支援者の側面における影響要因】が抽出された。

それぞれの要因の強さの程度はあれ、【個人の側面における影響要因】【組織の側面における影響要因】【支援者の側面における影響要因】の3つの影響要因があり、これらの影響要因は互いに関連していた。

5. 帰結 (表6)

帰結としては、＜安心して暮らせる地域文化＞＜誰にとっても安心な社会＞＜誰もが安心して暮らせる住みよい地域＞の3つのサブカテゴリから、【誰もが安心して暮らせる地域】が抽出された。

表5 影響要因

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	文献
個人の側面における影響要因	個人の力	知識や技術(知恵・意欲)	中山ら,2005;中山ら,2006;井出,2014;山田,2007;遠藤ら,2013;井上,2011;高木,2006
		セルフケア力(能力)	中山ら,2005;中山ら,2006;山田,2007
		支え手としての力(専門性が生かせる)	山田,2007;青山ら,2010
		主体的取り組み(役割発揮への意欲)	安梅ら,2005;平野ら,2011;杉澤ら,2006;青山ら,2010;中山,2006
		職業(自営業・地域の人々の互恵関係)	渡辺,2012
		意思決定	中山,2006;中山,2007;麻原,2000
		地域の体験・経験	井出,2014;大木ら,2006;大木,2008
	他者との交流	専門家との繋がり	中山ら,2005;中山ら,2006;平野ら,2011;杉澤ら,2006
		他人との交流・助け合い・学びあい・意見を共感的に聞く姿勢	中山ら,2005;中山ら,2006;中山,2007;福本ら,2013
		人と人との繋がり(距離感)	中山ら,2005;中山ら,2006;福本ら,2013;大木ら,2006;大木,2008;青山ら,2010;高野,2011
	個人の価値観・感情	世代間のコミュニケーションの円滑化	岡田,2009
		家族や周囲の協力・理解・活動への要望	福本ら,2013;遠藤ら,2013;高野,2011
	組織の側面における影響要因	グループの力	活動の意図づけ
活動目的・目標の明確化			中山ら,2005;中山ら,2006;松本ら,2013;福本ら,2013;中山,2007;安梅,2008;遠藤ら,2013;津村,2011;中山,2006;高木,2006;麻原,2000
活動方法(機会や場, 内容, 質, 柔軟な参加様式, 活動資金など)			中山ら,2005;中山ら,2006;安梅ら,2005;清水ら,1997;尾崎ら,2002;金川ら,2011;中山,2006;安梅,2008;岡田,2009;津村,2011
仲間意識(連帯感)や信頼関係の形成と維持(互いの生活体験を傾聴・共感, 助け合い・学びあい)			中山ら,2005;中山ら,2006;安梅ら,2005;杉澤ら,2006;清水ら,1997;尾崎ら,2002
組織の成長段階			中山ら,2005;中山ら,2006;福本ら,2013;麻原ら,2003;遠藤ら,2013
組織内での自分の立場・役割			中山ら,2005;中山ら,2006;中山,2006
グループ外の組織等(地域)との交流		課題の意識化・明確化及び共有(議論, 話し合い, 意思決定, 合意形成)	中山ら,2005;中山ら,2006;福本ら,2013;中山,2007;麻原ら,2003;清水ら,1997;尾崎ら,2002;津村,2011;中山,2006;麻原,2000
		専門家とのパートナーシップ(相互支援体制)	中山ら,2005;中山ら,2006
		地域における組織の立場	中山,2006
		組織と地域の交流の程度	中山ら,2005;杉澤ら,2006;中山,2006
支援者の側面における影響要因	直接的支援	直接的な支援(個別ケア, 健康教育, 財政的支援など)	中山ら,2005;麻原ら,2003;天野,2006;川本ら,2012;金川ら,2011;麻原,2000
		成果のアピール(活動の意図づけ)やバックアップ	松本ら,2013;中山,2007;中山,2009;安梅,2008;遠藤ら,2013
	支援者の知識・技術	パートナーシップの形成(協働)	中山ら,2005;中山ら,2006;大木,2010a;大木,2008;安梅ら,2005;福本ら,2013;中山,2007;麻原ら,2003;天野,2006;遠藤ら,2013;麻原,2000
		アドボカシーへの支援	大木,2008;大木,2010b;金川ら,2011
		時をつかみ, 人をつなぐプランニング(関係機関との連携, 機会の提供, 対話のしかけづくり, 場の提供)	中山ら,2005;中山ら,2006;大木,2008;大木,2010a;大木,2010b;天野,2006;津村,2011;中山,2006;麻原,2000
		コミュニティ・エンパワメントやコーディネートの知識や技術(住民のペースの尊重, 住民と地域を結びつける, 情報提供, 長期的で総合的な支援型アプローチ, 継続的な交流・話し合い, 親近感と刺激感の両方を併せ持つ, 変化のリズムをつくる)	安梅ら, 2005;杉澤ら,2006;安梅,2008;渡辺,2012;福本ら,2013;中山,2009;麻原ら,2003;山田,2007;尾崎ら,2002;森ら,2009;成木,2008;青山ら,2010;金川ら,2011;高野,2011;津村,2011;高木,2006;麻原,2000
	周辺地域の環境づくりや働きかけ	社会資源の活用と開発	中山ら,2005;中山ら,2006;福本ら,2013;中山,2007;中山,2009;麻原ら,2003;青山ら,2010;井上,2011;高野,2011
		職場等の支援(協力)体制の確保	安梅ら,2005;中山,2009
		行政施策への影響	中山ら,2006
		対象となる地域社会への理解や住民のニーズや力量の把握	青山ら,2010;遠藤ら,2013;麻原,2000
		活動を認めてくれる人の存在	青山ら,2010;金川ら,2011

6. 代用語, 類似語 (表 7,8)

代用語としては, <ヘルスプロモーション活動>のサブカテゴリーから, 【ヘルスプロモーション活動】が抽出された。

類似語としては, <コミュニティの繋がり<の再生><コミュニティの形成>の2つのサブカテゴリーから, 【コミュニティの再生】が抽出された。 <住民による公衆活動, 新たな公共性>のサブカテゴリーから, 【住民による公共活動】が抽出された。 <健康な地域づくり活

動>のサブカテゴリーから、【健康な地域づくり活動】が抽出された。<ソーシャル・キャピタルの向上>のサブカテゴリーから、【ソーシャル・キャピタルの向上】が抽出された。

表6 帰結

カテゴリー	サブカテゴリー	文献
誰もが安心して暮らせる地域	安心して暮らせる地域文化	中山ら,2005;渡辺,2012;井上,2011
	誰にとっても安心な社会	大木,2010b
	誰もが安心して暮らせる住みよい地域	山田,2007

表7 代用語

カテゴリー	サブカテゴリー	文献
ヘルスプロモーション活動	ヘルスプロモーション活動	福本ら,2013;中山,2009;清水ら,1997

表8 類似語

カテゴリー	サブカテゴリー	文献
コミュニティの再生	コミュニティの繋がり再生	大木,2010a;大木,2010b;高木,2006
	コミュニティの形成	成木,2008
住民による公共活動	住民による公共活動,新たな公共性	大木,2008
健康な地域づくり活動	健康な地域づくり活動	福本ら,2013
ソーシャル・キャピタルの向上	ソーシャル・キャピタルの向上	渡辺,2012;金川ら,2011

V. 考察

1. コミュニティ・エンパワメントの概念モデル

概念分析の結果を踏まえ、コミュニティ・エンパワメントの概念モデルとして図に示した(図1)。

コミュニティ・エンパワメントは、本質に、【人と人が緩やかな絆で繋がり支えあう関係に至る、地域の課題解決のプロセス。】があり、属性は、【すべての人々が対等な立場で参加する。】【自由な発言・議論により、意思決定・合意形成される。】の2つの特徴が示された。コミュニティ・エンパワメントを推進するためには、【地域の課題があること】が前提にあり、<自分と他人の両方を大事にしている。>等の【個人の側面における先行要件】、<リーダーの存在>等の【組織の側面における先行要件】、<支援者の地域住民への信頼及びコミュニティ・エンパワメントの視点>という、【支援者の側面における先行要件】が必要である。また、コミュニティ・エンパワメントは、【個人の側面における影響要因】【組織の側面における影響要因】【支援者の側面における影響要因】の互いに関連する3つの影響要因によって、強まったり弱まったりする。そして、コミュニティ・エンパワメントの結果生じる出来事として、【誰もが安心して暮らせる地域】が帰結にあった。代用語は、【ヘルスプロモーション活動】があり、類似語は、【コミュニティの再生】【住民による公共活動】【健康な地域づくり活動】【ソーシャル・キャピタルの向上】があった。

以上より考えられるのは、本質の【人と人が緩やかな絆で繋がり支えあう関係に至る、地域の課題解決の

プロセス。】は、地域の人々が、地域の課題解決に向け、トップダウンや強制力の働くような関係、または、希薄な関係ではなく、緩やかに繋がり、自由性を持ちながらも、互いに支えあう関係をつくるプロセスを示していると考えられる。地域住民と同じ目線に向かい協働することを十分認識すること、パートナーシップ(協働関係)が、コミュニティ・エンパワメントへの支援として、最も重要である(麻原,2000)。荒木(1998)も、「強者-弱者」「部外者-内部者」「ファシリテートする側-される側」「調査する側-される側」等の一連の固定化された関係性のくさびから自由になっていく発想の転換が必要になってくると述べている。保健師等の支援者がコミュニティ・エンパワメントへの支援を行う際には、活動に共感するパートナーであるという意識を常に持ちながら、地域住民組織と関わっていく重要性が示唆された。

属性の【すべての人々が対等な立場で参加する。】は、グループを構成する地域住民のみでなく、保健師等の支援者やそのグループが企画する事業等に参加する参加者等、そこに関わる全ての人々は対等な立場であることを示していると考えられる。【自由な発言・議論により、意思決定・合意形成される。】は、グループで話し合いが行われる際には、グループ内のメンバー同士のみでなく、その話し合いに関わる全ての人々は自由に発言・討論し、自分達で意思決定・合意形成しながら活動の方針等が決まることを示していると考えられる。すなわち、コミュニティ・エンパワメントは、人々が対等な立場で参加していること、その活動は自己決定しながら進められるという2つの特徴を持つ概念と考えられた。久木田(1998)は、エンパワメントのプロセスの中で重要なのは、プロセスの各段階で自己決定が行われることであると述べている。このように、住民同士が対等な立場で支えあい、自分たちで意思決定しながら、活動を進めることが重要であると考えられる。

2. 再構築したコミュニティ・エンパワメントの定義

概念分析の結果を踏まえ、再構築したコミュニティ・エンパワメントの定義を「誰もが安心して暮らせる健康な地域を目指して、組織や地域の人々が、対等な立場で互いに話し合い、合意の形成を行う中で、緩やかな絆で繋がり、支えあう関係を形成し、共通の課題解決に向かうプロセスである」と考えた。

3. モデルケース

再構築したコミュニティ・エンパワメントの定義を裏付けるために、臨床で遭遇した事例を述べる。モデルケースの内容が再構築した定義に当てはまる箇所に《 》で該当する言葉を入れた。

三つ子を持つ母親である。自らの子育ての中で育児

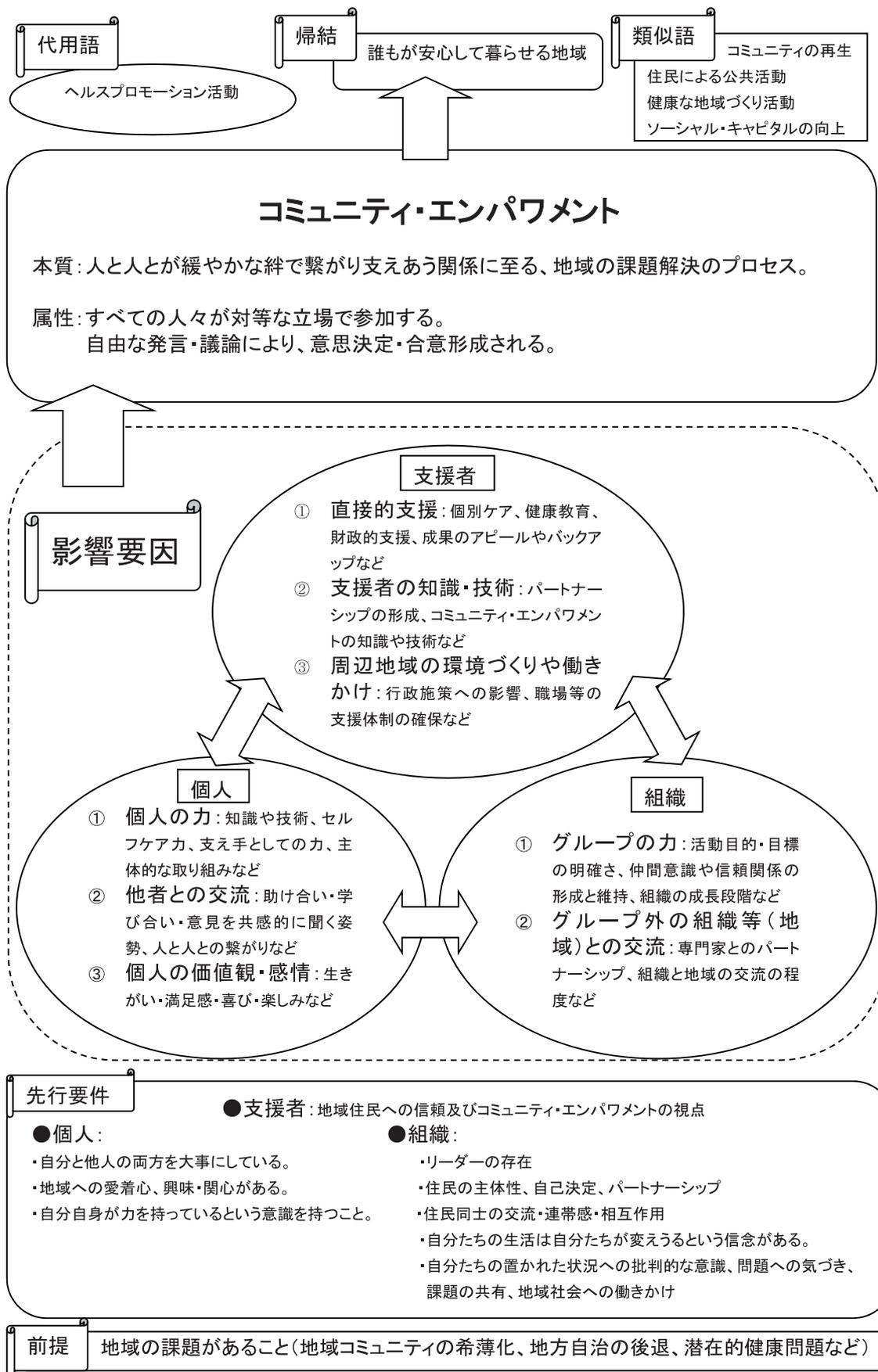


図1 コミュニティ・エンパワメントの概念モデル

負担があり、育児ボランティア等を利用しながら、夫婦で子育てをしていた。やがて、乳幼児相談の機会に、何人かの多胎児を持つ母親同士が、知り合い、互いに情報交換をする中で、育児負担や不安は、自分だけが感じているのではないことに気づいていった。その後、保健師等と相談しながら、多胎児を持つ母親達は、育児の不安という課題を解決するため、場所を公民館に移し、自主的に多胎児の育児サークルを結成した《緩やかな絆で繋がり、支えあう関係を形成する》。このように、母親達は、自分達で話し合いを持ちながら合意形成を行い、育児用品の交換会や茶話会等の活動を、育児ボランティア等と一緒にやってきた《組織や地域の人々が、対等な立場で互いに話し合い、合意の形成を行う》。

数年後、多胎児サークルの中心となり活動していた母親が、ボランティアコーディネーターと保健師の所に訪ねて来た。母親は、子ども達が就園するので、多胎児サークルを終わりにしようと思っていることを相談しに来た。3人で話し合う中で、せっかく続けてきたので、もう少し続けてみてはどうかと、保健師からの助言があった。母親はその後、サークルに戻り、メンバーと話し合い、多胎児サークルの活動を続けることで合意を得た。そして、自分の子どもが就園・就学後も、多胎児を持つ母親達は、アドバイザーとしてサークルに関わり、現在も、未就園・就学前の双子・三つ子を持つ母親達と共に、緩やかな絆で繋がりながら、支えあう関係を保って、多胎児サークルを運営し、活動を続けている《共通の課題解決に向かうプロセス》。

また、現在、多胎児サークルは、ボランティアコーディネーター、育児ボランティア、保健師をはじめ、子育て支援コーディネーター、育児支援NPO組織等とも連携をし、活動している。多胎児サークルは、誰もが安心して子育てできる街づくりを目指して活動し、地域の一資源となっている《誰もが安心して暮らせる地域を目指す》。

4. コミュニティ・エンパワメントへの支援

コミュニティ・エンパワメントの影響要因としては、【個人の側面における影響要因】【組織の側面における影響要因】【支援者の側面における影響要因】があった。保健師等の支援者は、コミュニティ・エンパワメントを推進するため、住民組織メンバーの個別ケア等、＜直接的支援＞を行うこと、＜支援者の知識・技術＞を高めること、＜周辺地域の環境づくりや働きかけ＞を行うことが大切である。さらに、組織としても、活動目的・目標を明確にする等、＜グループの力＞を高めること、＜グループ外の組織等（地域）との交流＞を行うことが大切である。そして、個人としても、知識や技術を身につける等、＜個人の力＞を高めること、＜他者との交流＞を

行うこと、＜個人の価値観・感情＞を大切にすることが大事になる、このように影響要因を高めることにより、コミュニティ・エンパワメントの推進を強めることができる。また、住民グループの成長には発展段階があり（細川、2002）、星ら（2010）の述べるように、準備期、創造期、継続・転換期、発展期の4つの段階に応じた支援が必要である。支援者は、グループの初期の段階である準備期から、コミュニティ・エンパワメントの視点を意識しながら発展の段階に応じて住民組織と関わっていく必要性が示唆された。

コミュニティ・エンパワメントへの支援を行うにあたっては、その土台作りとしての地域づくりが必要となる。住民グループには、地域の課題があることに気づいた住民たちが集まり、その課題解決のためにグループを結成する（組織を作る）場合、保健師等の専門家が主導し、人々を結びつけて住民グループを結成する場合、自治会・母子愛育会等の既存の住民グループ等がある。住民グループがコミュニティ・エンパワメントを推進する組織に成長するためには、前提である【地域の課題があること】に、グループのメンバー達が気づき、その課題解決のために、グループ内で話し合い意思決定しながら、主体的に行動を起こしていくことが必要である。大木（2010b）は、コミュニティの課題に取り組んで解決していく力が住民には、本来備わっていると信頼することが必要であり、コミュニティ・エンパワメントをめざす保健師の活動となる前提となる視点であると述べている。保健師等の支援者が住民組織とパートナーとして関わっていくためには、互いの信頼関係が必要であり、住民組織の主体性を尊重した関わりをしていく必要がある。と考える。

VI. 結論

コミュニティ・エンパワメントの概念は、文献検討の結果から、「誰もが安心して暮らせる健康な地域を目指して、組織や地域の人々が、対等な立場で互いに話し合い、合意の形成を行う中で、緩やかな絆でつながり、支えあう関係を形成し、共通の課題解決に向かうプロセスである。」と定義された。

支援者がコミュニティ・エンパワメントへの支援を行う上で、活動に共感するパートナーという意識を常に持ち、グループの発展の段階に応じて住民組織と関わっていく必要性が示唆された。

本概念は、現在は専門家により多様な意味で幅広く使われているため、地域活動において適用する場合には、共通の認識を持てるよう概念の用い方に留意する必要がある。また、コミュニティ・エンパワメントが、「誰もが安心して暮らせる地域」に実際つながっているのか、

さらなる調査・研究を要することが課題である。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、ご指導いただきました諸先生方に深く感謝いたします。なお、本研究は、筆頭者の埼玉医科大学大学院における修士学位論文の一部を加筆・修正したものである。

文 献

- 天野真奈美 (2006) : 精神保健医療福祉分野における家族支援とエンパワメント, 埼玉県立大学紀要, **8**, 25-31.
- 安梅敏江編著 (2005) : コミュニティ・エンパワメントの技法 当事者主体の新しいシステムづくり, 医歯薬出版, 東京.
- 安梅淑江 (2008) : コミュニティ・エンパワメント—当事者主体のシステムづくり—, 小児の精神と神経, **48** (1), 7-13.
- 青山美保, 井出喜子, 新志春菜, 他 8 名 (2010) : 地域活動を“いきいき”として支えている人の要因, 島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要, **4**, 129-136.
- 荒木美奈子 (1998) : コミュニティ・エンパワメント, 現代のエスプリ, 376, 85-97.
- 麻原きよみ (2000) : エンパワメントと保健活動 エンパワメント概念を用いて保健婦活動を読み解く, 保健婦雑誌, **56** (13), 1120-1126.
- 麻原きよみ, 加藤典子, 宮崎紀枝 (2003) : 焦点 グループ支援のための理論・技術・評価—地域看護に焦点を当ててグループ活動が地域に発展するための理論と技術, 看護研究, **36** (7), 49-63.
- 遠藤直子, 中山亜里, 山田悠美子, 他 7 名 (2013) : 地縁型地域保健組織による地区保健活動のプロセス, 東京女子医科大学看護学会誌, **8** (1), 25-32.
- 福本久美子, 今泉直子, 石田妃加里, 他 4 名 (2013) : 健康な地域づくりにおけるコミュニティ・エンパワメントと保健師の役割—旧蘇陽町における健康むら長体験者の追跡から—, 九州看護福祉大学紀要, **14** (1), 27-37.
- 平野真紀, 川島悠里, 杉澤悠圭, 他 11 名 (2011) : 高齢者支援に向けたコミュニティ・エンパワメント展開のためのニーズ把握—フォーカス・グループインタビューを用いて—, 厚生学の指標, **58** (7), 30-38.
- 星旦二, 栗盛須雅子編 (2010) : 地域保健スタッフのための「住民グループ」のつくり方・育て方, 医学書院, 東京.
- 細川えみ子 (2002) : 地域の健康文化を創る住民活動 グループ育ては子育てに似ている!, 保健婦雑誌, **58** (8), 636-64.
- 井出成美 (2014) : 高齢者の強みを引き出す支援を通じたコ

- ミュニティエンパワメント, The kitakanto Medical journal, **64** (3), 251-252.
- 井上深幸 (2011) : 介護予防の推進に向けたコミュニティ・エンパワメントの評価, 聖母女学院短期大学研究紀要, **40**, 1-7.
- 金川幸司, 今井良宏 (2011) : コミュニティ・エンパワメントと制度—阪神大震災後の NPO 活動から—, 社会・経済システム, **32**, 71-82.
- 川本晃子, 田口敦子, 桑原雄樹, 他 3 名 (2012) : 地域包括支援センター保健師が地域住民と協力して行った個別支援の内容, 日本地域看護学会誌, **15** (1), 109-118.
- 久木田純 (1998) : エンパワメントとは何か, 現代のエスプリ, 375, 10-34.
- Lorraine Olszewski Walker, Kay Coalson Avant (2005) / 中木高夫, 川崎修一 (2013) : 看護における理論構築の方法 (第 1 版), 医学書院, 東京.
- 松本美佐子, 篠原亮次, 渡辺多恵子, 他 11 名 (2013) : 社会性を育む保育専門職の役割に関する研究—コミュニティ・エンパワメントの視点から—, 日本保健福祉学会誌, **20** (1), 9-12.
- 森明子, 永森久美子, 堀内成子, 他 3 名 (2009) : 不妊女性の選択をサポートする環境づくり: 不妊をめぐるコミュニティ・エンパワメント—自助グループと看護職の協働によるアウトリーチの評価, 日本生殖看護学会誌, **6** (1), 34-45.
- 中山貴美子, 岡本玲子, 塩見美抄 (2005) : 住民からみたコミュニティ・エンパワメントの構成概念—住民による評価のための「望ましい状態」の項目収集—, 神大保健紀要, 21, 97-108.
- 中山貴美子 (2006) : コミュニティエンパワメントとは? コミュニティエンパワメントと保健師活動, 保健師ジャーナル, **62** (1), 10-15.
- 中山貴美子, 岡本玲子, 塩見美抄 (2006) : コミュニティ・エンパワメントの構成概念—保健専門職による評価のための「望ましい状態」の項目収集—, 日本地域看護学会誌, **8** (2), 36-42.
- 中山貴美子 (2007) : 保健専門職による住民組織のコミュニティ・エンパワメント過程の質的評価指標の開発, 日本地域看護学会誌, **10** (1), 49-58.
- 中山貴美子 (2009) : 住民組織活動が地域づくりに発展するための保健師の支援内容の特徴, 日本地域看護学会誌, **11** (2), 7-14.
- 成木弘子 (2008) : 都市での健康づくり活動に関するグループ支援を通じたコミュニティ・エンパワメント, 保健医療社会学論集, **19** (2), 8-20.
- 岡田千あき (2009) : スポーツを通じたコミュニティエンパワメント, 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, **35**, 1-22.
- 大木幸子, 星旦二 (2006) : 地域づくり活動における担い手

- 及びコミュニティのエンパワメント過程とその相互作用に関する研究, *The Nonprofit Review*, **6** (1/2), 25-35.
- 大木幸子 (2008) : 組織活動における公共性とエンパワメント, *保健医療社会学論集*, **19** (2), 21-32.
- 大木幸子 (2010a) : コミュニティ・エンパワメントのための援助技術 第1回 今こそ求められるコミュニティ・エンパワメントへの支援, *保健師ジャーナル*, **66** (1), 66-71.
- 大木幸子 (2010b) : コミュニティ・エンパワメントのための援助技術 第7回 コミュニティ・エンパワメントへの支援過程に共通する視点, *保健師ジャーナル*, **66** (7), 660-665.
- 尾崎米厚, 嶋野洋子, 島田美喜編 (2002) : いまを読み解く保健活動のキーワード, 医学書院, 東京.
- Rodgers, B.L. & Knafelz, K.A. (2000) : *Concept Development in Nursing, Foundations, techniques, and Applications*, 2nd ed., W.B.Saunders Company, Philadelphia.
- 清水準一, 山崎喜比古 (1997) : アメリカ地域保健分野のエンパワメント理論と実践に込められた意味と期待, *日本健康教育学会誌*, **4** (1), 11-18.
- 杉澤悠圭, 篠原亮次, 安梅勅江 (2006) : 住民参加型の保健福祉活動の推進に向けたコミュニティ・エンパワメントのニーズに関する研究, *厚生*の指標, **53** (5), 28-36.
- 高木由里 (2006) : 既存組織のネットワーク化によるコミュニティエンパワメント 「ええとこ発見図」作成過程を通じたコミュニティの再構築, *保健師ジャーナル*, **62** (1), 27-31.
- 高野美代子 (2011) : 地域住民の健康エンパワメント—介護予防意識と協働のあり方—, *豊橋創造大学紀要*, **15**, 145-156.
- 田代順子, 片岡弥恵子, 柴田秀子, 他2名 (2002a) : 経験を概念化する方法を使って看護現象に迫ろう! 「悲嘆」の概念分析 Rodgersの概念分析を使って, *ナーシング・トゥデイ*, **17** (11), 60-63.
- 田代順子, 片岡弥恵子, 柴田秀子, 他2名 (2002b) : 経験を概念化する方法を使って看護現象に迫ろう! 「悲嘆」の概念分析(2) Rodgersの概念分析を使って, *ナーシング・トゥデイ*, **17** (13), 60-63.
- 藤内修二 (2006) : なぜ, いま, コミュニティエンパワメントなのか?, *保健師ジャーナル*, **62** (1), 8-9.
- 津村薫 (2011) : コミュニティ支援に繋がる子育て支援, *女性ライフサイクル研究*, **21**, 46-53.
- 上村朋子, 本田多美枝 (2006) : 「概念分析」の主な手法とその背景についての文献的考察, *日本赤十字看護学会誌*, **6** (1), 94-102.
- 渡辺裕一 (2012) : 限界集落における高齢者ひとり暮らし時永住希望とコミュニティ・エンパワメントの関連—高齢者の生活を支援する地域住民のパワーとの関連を中心に—, *日本保健福祉学会誌*, **18** (2), 11-20.
- WHO (1986) : *ヘルスプロモーション—WHO オタワ憲章*, 垣内出版, 東京.
- 山田洋子 (2007) : 住民のもつ力を判断し地域づくりに向けて活用する看護援助方法, *千葉看護学会誌*, **13** (2), 63-71.